

1、単元設定の理由

(1) 本単元の主張点

①2Bの子ども達

学校生活にも十分慣れ、朝早くから登校し元気いっぱい、一人一人が個性豊かな2年B組である。子ども達は、素直で明るく、個人差はあるとしても、どの子ども課題に対して真面目に努力し向上しようとする意欲を持っていた。

しかし同じことをする時にもクラスとしてのまとまりがなくて、それぞれに優しさや思いやる気持ちを持ちながらもお互いによく表現することができないし、またそのような気持ちに気が付き、受け止めることもうまくできなかった。このような学級集団だからこそ、この「かさこじぞう」の学習(優しさや思いやり)を通して子ども達一人一人の気づきを育てていきたい。また、物の豊かになりすぎている時こそ、じいさまとばあさまの心の豊かさ、あたたかさ、たくましさ気づかせたい。

4月からの読書タイムでの子ども達の様子を見ると、大多数は本を読むことが大好きであった。自分の読みたい本をすぐに見つけ一生懸命読んでいる子、好きな絵本を楽しんでいる子などさまざまであった。

また読み聞かせの時の目の輝きなどから、読書に対する関心は大きいと言えた。しかし、中には本を手にしにくい子もいた。読書タイムだから、図書の間だから本を読まなければいけないと思って読んでいる子もいた。このように、当然のことであるが、2Bの子ども達も本に対しての興味・関心にレベル差があるが、どの子ども、もっとも本が大好きになってほしいという思いがあった。

②2Bの「読み」について

読むことを大切にしている2Bの国語の授業では、子ども達は声に出して読む時には、自分なりのめあてをもって読んでいた。そしてそのめあてにあった読みができたかどうかという自己評価とともにその読みを聞いてもらった人からの他者評価もしていた。

2年生という発達段階から子ども達は、自分の読みを聞いてもらいほめてもらおうと、より意欲的になる。

私は、今までの授業の中でも、できるだけ読みを聞き合ったりする時間を持ってきた。最初の単元「ふきのとう」においても、場面の情景を想像しながら声に出して読むことを大切に、友だちの読みを聞いて自分の読みをふりかえるという時間を多く取り入れてきた。さらに時には、自然豊かな環境に恵まれた我が校の校庭で風を感じながら、お互いの読みを聞き合ったりしてきた。また、読書力をたかめるために読書する時間をできるだけ多くとったり、読み聞かせの時間の確保や読書タイムの時間や授業のちょっとした時間に、音読集を利用して発音・発声や間・リズムなどの練習のあと季節や行事に関係ある詩の音読をしてきた。そうすることによって、学習教材の読みが確かになり、深い読みができるようになると思うからであった。



また、読書力をたかめるために読書する時間をできるだけ多くとったり、読み聞かせの時間の確保や読書タイムの時間や授業のちょっとした時間に、音読集を利用して発音・発声や間・リズムなどの練習のあと季節や行事に関係ある詩の音読をしてきた。そうすることによって、学習教材の読みが確かになり、深い読みができるようになると思うからであった。

③日本の昔話「かさこじぞう」

この教材「かさこじぞう」は昔から人々の間で口承によって伝えられた民話で、2Bの子ども達の半数近くは、今までに聞いたことのあるお話の一つであった。

民話は、支配者に絶えず押さえつけられ、こき使われ、しいたげられてきた民衆に語りつがれた、『夢』の世界である。不思議なことが当たり前であったり、最後にはお金持ちになったり、幸せや富をひとりじめにしない世界であるが、子ども達は、そういった世界をくぐることにより、民衆の生きる力や生きる喜びや悲しみをくみ取ってくるであろう。それは、物質的に豊かになりすぎている子どもに必要な力の一つと考えた。また、民話は、構成の強さやおもしろさが、まさに低学年の子ども達に向いている。ちょうど2年生ぐらいの子ども達は、物語を読むとき、必ず登場人物の言動を追っていく。登場人物の言動が単純で構成がしっかりしていれば、子ども達は、一読してあらかたの頭に入れることができるのである。さらに、民話のもつ単純性、明快性、完結性、そして、語り口の柔らかさ、親しさも低学年の子ども達の心理にぴったりであると考えた。

「むかしむかし、……ありましたと。」という民話特有の口調は、2年生の子ども達にとって親しみやすく、民話の世界にすんなりはいっていくことができるであろう。このような民話の口調にも興味を持ち、お話の世界が味わえるように語りかかせたいと思った。

また、じいさまとばあさまの会話や擬声語・擬態語にも工夫を加え音声化することができたら、この時期の子どもによるステキな民話の世界が生まれるであろう。

じいさまとばあさまの会話で物語が展開されているので、2年生の子どもにもわかりやすいので、登場人物の性格も理解しやすいだろう。特にじいさまの独り言がいくつか見られ、じいさまの性格や心情をイメージしやすくなっている。

「…のう」というじいさまとばあさまの会話の語尾により、お互いを優しく思いやる雰囲気が味

わえるだろう。音声化することにより、二人のそれぞれの場面においての様子想像も可能になると考えた。学習終了後にはこの「かさこじぞう」を楽しく語らていきたいと考えていた。

この話の中のじいさまとばあさまの暮らしぶりについて、「たいそうびんぼうで、その日その日をやっと暮らしておりました。」「・・・なんにもありませんのう。」「もちこの用意もできん」「売るもんでもあれば」「つけなみかみ、おゆをのんで」など、現代の豊富な物に囲まれている子ども達にとって、とうてい理解できない生活であろう。しかし、二人の貧しい暮らしぶりをしっかりつかんでいないと、じいさまのおじぞうさんに対する思いが伝わらないし、歩くはずのないお地蔵様が、正月の用意の品物を運んで来るという、意外性のある結末を理解することはできない。

子どもなりの生活経験から、正月の用意について話させることにより、じいさまとばあさまの貧乏な暮らしぶりについて読み取らせていきたいと考えた。

また、子ども達は、一読して二人の優しさに気づくであろう。雪の降る中、売り物のかさと自分の手ぬぐいまでもを、お地蔵様にかぶせてしまうじいさま、そのことをいやな顔一つしないで、じいさまをむかえたばあさまを指している。

しかし、子ども達がとらえる優しさは単なる表面上の優しさでしかない。じいさまとばあさまは、「たいそうびんぼう」で、正月の用意もできない生活である。しかし、お互いが支え合い、家にあるすげでなんとかかさを編む。かさが売れず、家で楽しみに待っているばあさまのことを思い、「がっかりするじゃろうのう」とつぶやくじいさまにも優しさはみられる。貧しい中でも、お互いを信頼し、仲良く明るく生き、優しさを失わないことを、また具体的に「誰に向けた、どんな行動が」優しさなのかをじいさまとばあさまの会話や行動から読み取らせたいと考えた。

④指導にあたって

「かさこじぞう」の学習を進めるにあたり、この教材が昔話であることから、「語り」を取り入れて読みを深めようと考えた単元であった。そこで、二学期のはじめから、日本の昔話の読み聞かせや読書の時間を十分確保し、昔話に共通するストーリーの展開やその楽しさに気づいていけるように配慮してきた。

今回の導入では、本校の保護者の方で組織している図書ボランティア「La-La-Lu」さんに協力していただいて「お話会」のような形態で、読み聞かせを実施した。昔話特有の語り口調も興味を持ち、最終のイメージを持つと子どもは主体的に音読し始めると考えたからであった。

さらに、今の子ども達にとって、じいさまとばあさまの暮らしぶりはつかみにくいところが多い。

物が氾濫し、十分満ち足りた生活をしている子ども達には、「たいそうびんぼうで、その日その日をやっと暮らしておりました」という様子は理解しがたいだろう。「正月の用意」にしても、「正月買いもんの人でおおにぎわい」にしても、元旦からコンビニに買い物に行く今の生活からは想像することはできない。

教材の挿絵から何もない様子や、子どもから見た正月の用意について話させることにより、二人の生活の様子や正月を迎える喜びとその準備について「大年」や「おどろ」「あいどり」「長者」「かます」などの難語句と合わせて説明を繰り返し行った。

学習を「語り」へとつなぐために、一番気に入ったところから音読していった。気に入ったところへの思いを強く持つために、なぜそこを選んだのかという理由を書き、発表する場も持った。

初めは、隣同士の二人組で互いの部分を音読して聞き合い、工夫を加えながら練習していく。次は、音読を通して、「じいさまのお地蔵様への優しさ」と「ばあさまのいやな顔一つしないで、じいさまを迎えた優しさ」に焦点をあてて読み深めていった。

この教材で、「語り」の練習をしていった。初めは一人で練習する、次は二人で、さらには、グループで練習をした。また、一つの話になるように、数人が集まって練習するなど、いろいろな形態の練習の場を持ってきた。

必ず自分の読みが誰かに聞いてもらっているという緊張場面を設定し、自分の読みのふりかえりの機会も大事にした。

友だちの読みと自分の読みと比べながら、聞き合う機会を多く取り入れ、友だちの読みを感じ取り、その場面の様子などみんなで話し合っていくことで、今まで自分で考えていた以外に様々な読み取りがあることに気づくようにした。子ども達は、お互いの読みを通して思いを伝え合う中で、お互いの読みを認め合うように考えたからであった。

さらに、自分の想像を友だちに分かるように話したり、友だちの想像を自分の想像と比べて聞いたりしながら、自分の思いを声に出して、楽しく読み深めていき、この作品をとおして自分の読みをつかませたいと考えた。

そんな学習をみんなで積み重ねていき、究極には、一人で「かさこじぞう」を語れる子どもまで来て、昔話の世界が広がることを願っていた。



(2) 教科提案とのかかわり

2年生の子ども達は、自分の考えや思いを相手に的確に言葉で伝えられる子もいるが、自分の考えや思いをうまく言葉で伝えきれない子が多い。そこで私は、国語の学習のテーマを「音読をとおして自分の思いを伝えよう」とした。その基礎として、また子ども達のまなざしをしっかりとっていくためにも、指導者が、子ども一人一人の日常の行動や発言を的確にみとり、支援していかなければならない。そうすることで子ども達も自分のまなざしを相手に伝えることにより、お互いにまなざしを理解しあえるものと考えた。

しかし、お互いのすべてのまなざしを認め合うのではない。たとえ自分と違ったまなざしであっても、その子のまなざしにしっかり耳を傾け、そんな考えもあるのかと認め合うことが大切である。そんなクラスづくりを基盤として、授業の中で、積極的に自分のまなざしを相手に伝え、また友だちのまなざしをも認め合える子ども達になってほしいという思いがあった。なかでも、わからない時に「わかりません。」と言える子ども、わかりにくい友だちにやさしく手をさしのべられる子どもになってほしいと願っていた。それが、子ども達が関連して伝え合う姿であると考えた。そのためにも、自分の思いが出しあえるしっかりとした学級集団にと考えていた。

私は、読む楽しさを味わわせる一方法として「声に出して読む」ことを大事にしたいと考えていた。声に出して確かに読めることは、内容理解の端緒をつくる。文字記号を自ら音声化することによって、「言葉」が単なる記号でなくなり、文章の中で意味あるものとしてとらえられるようになる。

また、どのように読めば情景・人物の心の動きや変化などを表現できるか、自分の耳に聞こえる音声をとおして思考できるようになる。このことで内容理解にもつながっていくと考えたからである。さらに、どのように読むかという意識が働き始めると、そこで表現の巧みさ、美しさ、おもしろさなどが心に留まり、「なぜ、ここではこんな表現を？」と内容と関連づけて思考することができるからである。そして、すらすらと読めるようになると、作品全体が子どもの頭に映し出されて、全体から部分、部分と部分、部分から全体へと眼をむけることができると考えた。

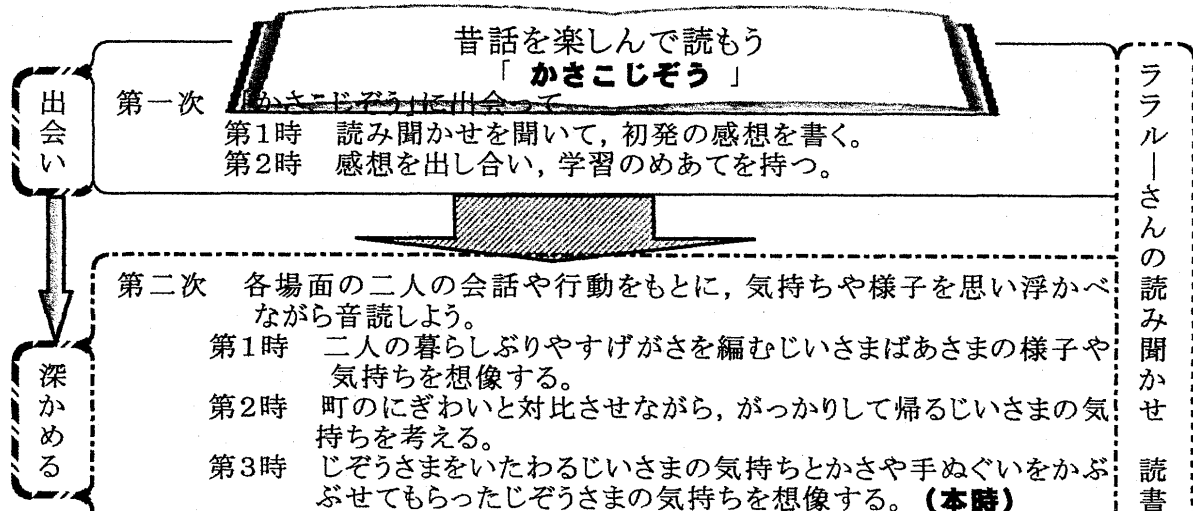
新学習指導要領でも、「声に出して読む」とは、文章の内容や響きを理解するためであり、同時に聞き手などの相手にも分かる読み方をするることである。「話すこと・聞くこと」とにもつながる大切な内容であるとされている。

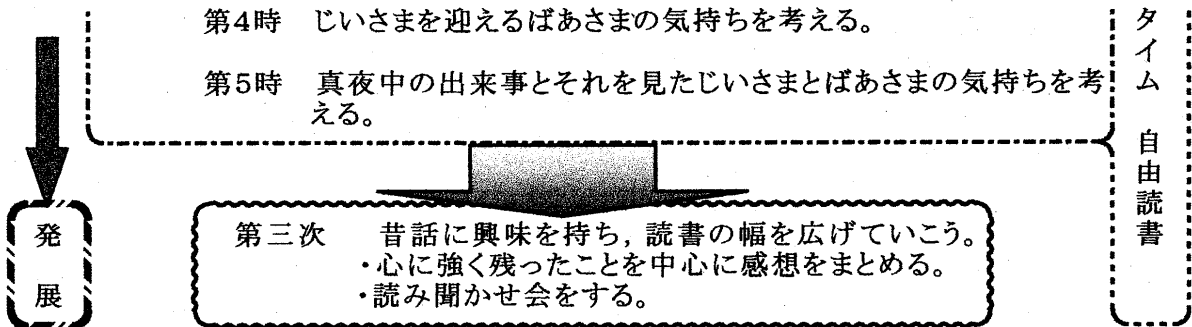
私は、書かれている内容を正しく読解するためには、一字・一語・一文を大事にしながら、一連の文章を声に出して読むことが大切であると考えた。声を出して読むことで、より言葉を意識し、場面の想像につながる。そして、読解を進めていく中で言葉の意味を理解し、より場面が想像できるようになる。さらに間やリズム、イントネーションなどが加わることにより深まりのある読みに進んでいくと考えた。子ども達が思いをこめて声に出して読む、楽しんで読む、また友だちの読みを聞いたり、グループで読んだりしながら、また自然に動作も入った読みをする中で、読みを広げ深めていけたらと考えていた。

2. 単元目標

- ・ 昔話を読む楽しさを味わわせ、人間の心の美しさ・温かさを感じ取ることができる。
- ・ じいさまとばあさまの行動描写をとらえ、二人の会話、擬声語や擬態語を工夫して、楽しんで音読できる。
- ・ 自分と友だちの音声表現の違いから、さらに深く人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読むことができる。
- ・ 友だちの考えに耳を傾けながら、自分の考えを根拠も大切にしながら、はっきり伝えることができる。

3. 単元計画 (全10時間+α)





4. 単元の考察

(1) 主張点とかかわって

二学期、2Bの読書を昔話中心にしてみようと計画した。そのため一週間に一度のLa-La-Luさんによる読み聞かせ、子ども達が手にしやすいようにと学級文庫を昔話シリーズにした。そうすることで、子ども達は昔話に親しみ、この「かさこじぞう」の授業も楽しく進めることができた。そして授業を通して、じいさまばあさまの「やさしさ」に気づいていってくれたと思っている。今後は友だちのやさしさ、さらに自分自身の中にあるやさしさに少しずつではあるが、考えていってくれと思っている。また、この授業後には、一人で「かさこじぞう」を語れる子になってほしいという思いもあった。子ども達はひとり読み、二人で、さらにはグループで練習を積み重ねてきた。その練習時には、必ず自分のめあてを持って読み、読んだ後には自分の読みのふりかえりと他者評価を繰り返し繰り返し行ってきた。その結果、一人で「かさこじぞう」を語れる子ども達になっていった。そして、自分の「かさこじぞう」を友達に、また低学年の子に、さらには、三人グループになって役割読みを聞いてもらう機会にも恵まれた。このように自分の読みをクラス以外の場で聞いてもらうことで、子ども自身の中に「自信」と「できた喜び」と「読書への意欲」が生まれたように感じる。

(2) 互いのまなざしが響き合う姿は

子ども達にじいさまの「やさしさ」について考えさせたいと思い、今回は、じぞうさまがかさや手ぬぐいをかぶせてもらって、どういう思いであるかについて話し合いをした。

MA 「かさ一つ足りないから、じいさまは自分がかぶっていた手ぬぐいをかぶせてくれた。

本当にありがとう、やさしいなあ。」

Ma 「自分の手ぬぐいまでとってくれた。大事にしてくれるなあ。」

ON 「MAとにいて、6番目のじぞうはかさこじよない、つぎはぎだけでもうれしい。」

MA 「じいさまって頭いい。手ぬぐいとか一番あったかいなあ。」

MS 「じいさまの気持ちが手ぬぐいにこもっていてあったかいと思う。」

S I 「手ぬぐいをくれてうれしい。じいさまは、手ぬぐいなしで大丈夫かなって思っている。」

MS 「6番目のじぞうさまは、自分の手ぬぐいをかしてくれて感謝している。」

KS・ON 「そこは、気づかなかった。」

というような2年生の子ども達のまなざしが響き合う姿が見られたように思っている。

5. 成果と課題

子ども達は、La-La-Luさんの読み聞かせを聞いた後、すぐに「かさこじぞう」の世界に入っていく、自分が一番心に残った場面や気に入ったところから音読を楽しんだ。学習後には、クラスのほとんどの子ども達が、自分の昔話「かさこじぞう」を語れるようになった。今でも、「…のう。」という言葉に「…のう。」と返してきてくれる。単元導入にLa-La-Luさんの読み聞かせを取り入れたことは、子ども達にとって、お家で母親から昔話を聞いているかのように自然とお話の世界に入っていたので、非常によかった。また、子ども達にとって自分の気に入ったところから音読に入っていたことで、無理なく読みを深めていけたようであった。教室の掲示には、かさこや手ぬぐい、どてら、さらに手づくりのじいさまばあさまがいろいろにあたっている場面、雪の中の六じぞうなどを置くことにより、子ども達をより物語の世界へ入りやすくした効果があった。

登場人物の気持ちを実感的に読み取らせるには、人物を外側から説明的に見させるより、読み手を作中人物になりきらせることの方が有効である。本時では、かさや手ぬぐいをかぶせてもらったじぞうさまの立場になって、雪の中を何もかぶらずに帰って行くじいさまの姿、様子を思い描きながら、じいさまへの気持ちを話した。その中に「じいさまは、自分のことより自分達(地蔵様)を大事にしてくれる。」「かさこじゃないけど、手ぬぐいでいい。」「手ぬぐいってあったかい、じいさまの気持ちがこもっているから。」など出てきた。私はこの地蔵様の立場にたったの話し合いは、共感的な読み取りをさせる上でも、また、じいさまのやさしさを鮮明化させる上でも、非常に有効であったと思う。子ども達の話し合いは、その殆どがその場にふさわしいものであった。それは、音読を通して物語の筋の展開や場面の状況をしっかりつかませていた結果であると考えている。

この授業から私自身も、「音読」の楽しさを再認識し、これからも子ども達と一緒に、楽しく授業をしたい。